

# 甲状腺外科草子 95

## 古文復習：古今の月見る月

杉野 圭三

古今和歌集は最初の勅撰和歌集で多くの名歌が選ばれている。最近では「NHKの100分de名著」にも取り上げられ、渡部泰明先生の名解説で好評を博した。

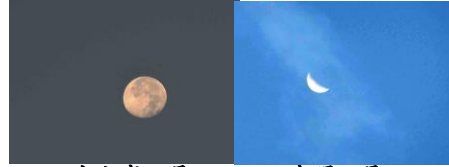


古今和歌集は貴族の教養として重要とされ、枕草子第二十段にも、裏付けの記述がある。

村上（天皇）の御時、宣耀殿の女御と聞こえけるは小一条の左大臣（藤原師尹）殿の御女に御座しましければ、中略、要約すれば女御の父は「書道、琴、和歌の勉強をするように、特に古今集の二十巻を覚えるように」と教えた。ある時、村上天皇が古今集を持って「其の年、其の月、何の折、其の人の詠みたる歌は如何に」と質問したところ、女御は前半の十巻全てに正解した。残りは明日にしようとした天皇だが、気になり残りの十巻の歌も問うたが全てに答えたと言われている。

古今集にも万葉集同様、月の名歌が残る。  
天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも (406, 百人一首7, 安倍仲磨、)  
月やあらぬ春や昔の春ならぬ わが身ひとつはもとの身にして (747, 在原業平)  
おほかたは月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの (879, 在原業平)  
月見ればちぢにもものこそかなしけれわが身一つの秋にはあらねど (193, 大江千里)  
大空を照りゆく月しきよければ雲隠せども光消なくに (885, 尼敬信)  
ひさかたの月の桂も秋はなほもみぢすればや照りまさるらむ (194, 壬生忠岑)

満月も美しいが、月の満ち欠けによる変化も楽しみの一つである。



十六夜の月 有明の月

十六夜 (いざよい)：十五夜に比べ約30分月の出が遅く、月がいざよう (ためらう) と表現したもの。

有明の月：明け方の三日月は独特の風情があり、後朝の文などに数多く詠まれてきた。

朝ぼらけ有明の月と見るまでに吉野の里に降れる白雪 (332, 百人一首31, 坂上是則)

有明のつれなく見えし別れよりあかつきばかり憂きものはなし (625, 百人一首30, 壬生忠岑)

今来むと言ひしばかりに長月の有明の月を待ち出でつるかな (691, 百人一首21, 素性法師)

月の写真撮影は手ブレ、感度・露出設定など難しく、スマホの方が簡単である。



雲間の月

夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを雲のいづこに月やどるらむ (166, 深養父)

しのぶれど恋しき時はあしひきの山より月の出でてこそ来れ (633, 紀貫之)

あひにあひても思ふころのわが袖に宿る月さへ濡るる顔なる (756, 伊勢)

宵の間に出でて入りぬる三日月のわけても思ふころにもあるかな (1059, よみ人知らず)

古今和歌集は近世、正岡子規、萩原朔太郎らによる批判的評価に晒された。しかし、「六歌仙」だけでなく多くの歌人により独創的な名歌が詠まれた。紀貫之らが「仮名序」において「やまとうたは、人の心を種として、よるづの言の葉とぞなりける」で記した通り、この歌集は後世の手本となる古典と考える。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024年3月21日